

マイストーリー

● MY STORY

自閉症の少年との出会いが小学校教諭の人生を変えた。

20年前、少年は母校の宮地小学校(阿蘇市)にいつも顔をみせていた。話し相手を求める

NPO法人
夢屋プラネットワークス代表

宮本 誠一さん(51)



ように教諭らに声をかしていった。一緒に遊んける。当時、同校で教べんを執っていた宮本さん。気になって同僚に聞くと、学校の向かいに住んでいる高校3年生で、元担任らが将来を案じ、少年宅で集まりを開いているという。通うようになり「自分が力になれないか」と考えた。教育現場で

た時期だった。大学時代は、ボランティアで障害児と交流が校長に非難の目で見られた。しかし、実際に就職に就くと組織の壁にぶつかかった。当時、熊本で実施された個人学習診断テスト。障害児も含めて受験させ、競争となる。何の意味があるのか。異議を唱えた

自閉症の少年と出会い教師退職

障害者の居場所を守る

られた。教員個人の考えより、上が決めたことが絶対。そんな教育現場に限界を見た。少年は結局、施設に通い出した。だが、はじめを受けた。そのストレスは家庭での暴力となって現れた。追い詰められた母親はある夜、息子の首に手をかけた。「殺して。お母さん」。その言葉で我に返ったという。

話を聞き、無力さのうちひしがれた。「学校から道一つ隔てた場所、親子が生きるか死ぬかの生活をしている。それなのに自分はその報告書を書いている。こんなに多くの教師がいても少年一人

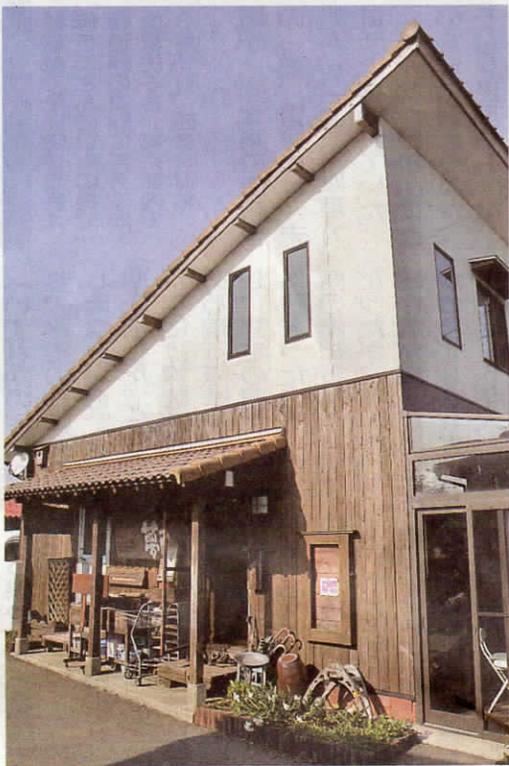
すら救えないのか」。退職に踏み切り、少年のもとへ飛び込んだ。教師となって5年目、33歳のことだ。母親の趣味を生かして、少年宅1階に96年にオープンしたパン作りの作業所の名は「夢屋」。「少年が楽しく働ける場所を作ろう」。その一心で喫茶スペースも設け、地域の人も集うようになった。ところが、その3年後。少年が転落事故で腰を粉砕骨折。大手術の末、一時は回復したが、帰らぬ人となった。頭の中が真っ白になった。

火葬場で喪失感に沈みながら、遺骨を眺めていると、熱で赤く輝くものが目に付いた。手術の際、身体に埋め込まれた大きな鉄のボルト。「僕が生きた証しを伝えていって」。少年がそう訴えているように思えた。

苦勞続きだったが、夢屋を守り続けてきた。居間には施設の象徴ともいえる大きなテーブルがある。「みんなが食事を作ったりするんですよ」。今も地域の障害者のかけがえのない居場所である。

【山田宏太郎】

人生の軌跡を描く「マイストーリー」は隔週日曜日に掲載します。



三角屋根がトレードマークの夢屋